

特 54

22

京都筋書

東京原典



第壹 目 盲長家梅加賀鳶

- 第一 湯島天神社内の場
第二 御茶之水土手の場
第三 本郷木戸引揚の場
第四 加賀鳶梅吉内の場
第五 氣坂道玄借家の場
第六 春木町伊世屋の場
第七 小石川關口宅の場
第八 同水道端川岸の場
第九 日影町松藏内の場
第十 裏家道玄捕物の場
第十一 加州侯屋舖前の場
第十二 三四番屋御調の場

大 浄瑠璃 花合四季盃

浅草公園夢の屋の場
清元延壽太夫連中
竹本太夫連中

明治十九年四月九日

盲長家梅加賀鳶 第一番目 筋書

湯島天神社内の場此所より文久二年正月十五日にて
上野浅草へ掛殊の外賑ひ分て當社内の神樂殿矢場水茶
屋の前杯群集なり...

加賀屋己之介 伊世屋平吉 京原業平 在賀西の吉 小守太左衛門 關口新五郎 百性太郎 加賀兼五郎 道玄女房 梅吉兵衛 家主喜兵衛 花主我房 松藏分杉 同役早次郎 手先野村 接出住九郎 狀屋の丁三 賈酒若三郎 居酒若三郎 同役若三郎 太次右衛門 太次右衛門 小按の唐子 侍女小唐子 加賀左衛門 關口左衛門 烏帽子赤之助 小野道風

侍女若石松 加賀屋己之介 關口新五郎 米屋の八八 按摩木代七 資屋の手次郎 法華講源次郎 駕番平介 同番人介 夜番人介 百性太郎 辻講師一六 中門伊三郎 寺門番三郎 中門番六郎 茶見世娘谷 御家人妻秋 茶見世娘やま 松藏妹五郎 加賀雷五郎 女按摩の兼 洗濯婆の兼 梅吉女房の兼 櫻木女房の兼 小野小町花 小按摩の兼 加賀鳶の兼 死神の兼 接摩の兼 股唐市兵衛

内の松金屋で酒汲かわりて万事の咄を致升夫で母御の
同道してと三人連立松金屋へ行此跡へ茶見世櫻木のお花
加賀鳶己之助と連立歸り來り母の留守に隣家成梅松の
お山に聞に今買店の番頭佐吾兵衛加賀鳶雷の五郎治と同
道なしお前番頭の圍者相談して行し故其了簡をする
が能と密に告るよお花の心も心成す己の助と別るを厭
居所へ母娘の歸りを心配して再此店へ來り今番頭様松
金屋にて貴様の身の上にて待兼故直我と一所來れどお
花を無理引立行跡に己之助の途方に暮れのお花と別れ
るの苦る敷様子を松金屋方密に戻り來て様子を見て五郎
治が小聲を立出委細い後で立聞いたが左様な心配せずと
夫性變敷お花なら二人連立此湯島を逃るのが早手廻りと
悪工み成五郎治が進めを己之助耳も掛す夫の只の者の
成事平人とい言乍我の名に負加賀鳶の頭と言る、梅吉の
子分で二とい下らぬ己之助此茶見世の女を連れ逃たと世
間へ言れては此後頭へ顔が立ねると斷る詞(五郎次)い

胸の木算違し此(己之助)と梅頭の女房と様子が怪敷のみが此(五郎次)が思を掛ゝあひ女房を口説落し己之が居ての邪魔成とせふがなして追退け様との工事も不承知成と己之助の其儘そこを立去(五郎次)一人跡に残せようて能工夫をせず成と思案中端へ梅吉女房娘(か梅)を子守成(お民)に脊負當社へ來り茶店も憩を(五郎次)見能折成と子守を神樂殿の邊へ紛らゝ女房かすがを引寄て梅頭の當節吉原の三州屋と言女郎屋の玉の井と云女郎又馴染毎日の晝遊び日の暮るゝ漸く屋敷へ出勤成が始終のい前も離別されんとそくらをかゑと耳も掛ぬ女房が操正敷挨拶も當が違し其所へ同役の(中間兩人)子守が足を踏し連引立來る言掛りも扱女房の詞さへ用ひぬ相手の悪仲間竟に己之助走來て此中間等を打倒し疵を負して歸しけるが此仲間を打たるが抑喧嘩の根元にて竟に大事に至りしの名お加賀鷲の樽高き湯島の喧嘩の進みて跡(己之助)か菅子供を連其夜と歸宅すると云件にて幕

二幕目水道橋際御茶の水土手の場前湯島天神の同夜も一て正月十五日といふ云道も淋敷小石川道安へ來掛る其者と青梅在の物持白姓太次右衛門と言者毎月江戸へ絹物之仕切を兼て來る者よて此日暮水戸侯屋敷前へ差掛たるの五ッ過人通りもなき御茶の水方聖堂差て來懸る途中余寒も起る疝氣の惱み腰が釣て歩行出來ず道にイミ苦痛も堪兼途方も暮て問もなく毎夜此道へ流て來る(按摩道玄)丁度此夜も笛を鳴按摩針と呼乍來りて彼病者に行當此余寒の強ひのよ往來中に住居せられ一と如何成譯と尋ねられ疝氣も惱ミ斯の思義と一部始終を物語を(道玄)心を察遣り夫の嘸御雜儀ならん我も此盲目に成迄の種々の病も此盲目實に御察中上ると最懇に介抱なせを(太次兵衛)は盲人の深切成に腰の痛も快氣に趣き御影よて本服せり此上の御身と共に私定宿神田明神下の甲州屋迄行度思へば御同道頼度由(道玄)の委細承知と連立行も心には今介抱の折病人の腹も當り一胴巻の金と儘に小百兩と胸



と浮悪心も爪突振りてうつむきたる拍子も(百姓太次右衛門)の腰腹當てらうの腕立所も氣絶なすを(道玄)心も打らなづき邊りに人通無を伺ひ兩眼見開く偽盲目胴巻の金引出一行と一たる其折も息吹返す(太次右衛門)己盗人待をれと袂捕へて聲立てバ他聞が有て一一大事と太次右衛門が持たる道中の用意の腰差引たくり病苦も惱(太次右衛門)を無慚もこそ切倒一所持の胴巻引出一我財布へ金納め行となしたる向か爰へ來掛る其者の加州侯の出入齋日影丁の(松藏)此夜佐久間丁か小石川飛坂迄行往復と思わず爪突死骸に目を扱と思ふ其際も落散たる貫入扱いと心月影も向ふを見れば按摩の後る影是を見送たんせりにて幕

三幕目本郷六丁目町木戸場此場と同正月十六日の事よて前夜湯島天神社内にて同役の火消中間と加賀鷲の(己之助)と喧嘩せしが初にて夫事起竟も同役の中間一統本郷成加賀鷲の詰所へ押來らんとする由を聞近邊の町への

住居の表戸又町木戸を打其間くは是を見物せんと一
たる者群集なり花道より群集れ見物職人も有武士も有り
鷹の者の仲人に掛合たる江戸中の組合の人足も有此町木
戸の所へ来り行ッ戻ッ大混雑の所有て一統木戸の内へ通
ると頓て花道第一番に加賀齋日影丁の(松藏)次は竹丁
の(兼五郎)並(雷五郎)次(伊豆石松)まさかりの(斧吉)天
神巳の助(千太)左衛門(金十郎)長右衛門(音右衛門)(幸
兵衛)芳五郎(政五郎)國左衛門(正右衛門)(小吉)其外五十
八人の加州侯御抱鷹人足並に御手子各丸又斧の打違の皮
羽織を着一道具持手鏡平人の長鏡鉢巻草鞋銅鑄造の腰差
ぶつ込花道方町木戸の向に來る同役火消の勢列の場所へ
喧嘩又押掛ん勢にて出來る此有様ハ恐る敷既ハ眞先立
たる日蔭丁の(松藏)が差圖に一統木戸を打破り通り過と
去たる時向の町方飛込來るハ加賀齋(天神の梅吉)よて是
も同敷加州侯の印の附たる皮羽織銅鑄造の脇差又草鞋掛
手鏡を打出て此中へ割て這入此喧嘩の事ハ附て八番組の

頭手合が仲人と成今此木戸の向ふに同役の火消と相談最
中よて此音響で一番二番遂に江戸中の組合が此本郷へ
不殘出張爪も立ねる人込故此喧嘩ハ八番の組合を初めと
して江戸中の鷹の者へ任して呉ると達ての頼何と聞てハ
吳まいかとのつ引成(梅吉)が詞ハ重立(松藏)ハ一統に打向
(松藏)どふだ聞たか今梅再方組合ウラ頼まれた仲人の一
件折角是迄押出したが今是を利ねへ時ハ組合手合へ濟ね
るのみか屋敷へ余慶な御手敷掛是も道でねへ事故一統の
了簡次第で咄合する氣がどふだ返事を聞て呉ると
眞先立たる(松藏)と(梅吉)の扱に何と故障を言者無(齋)夫
での万事の頭手合の了簡に任せるウラ宜敷様に頼と升と
詞揃へて言ける故(梅吉)(松藏)大又喜ハ流石ハ加賀抱鷹
能詞を利て吳たそんなら是から穩便に此場ハ此儘仲人に
任せて屋敷へ引取ると町木戸の向ふへ挨拶なし皆一統に
花道へ掛る所を幕引附ケ幕外にて着去たる皮羽織を脱持
たる長鏡を揃へて構へるを加賀齋の行列といふ此式よて

花道を勢揃ひの引揚の模様を見せる幕外の引込よて此場
終り

四幕目湯島天神前加賀齋梅吉内の場此場ハ同正月十八日
よて前件の仲人種々の盡力にて手打よ成たる所當家の主
人(梅吉)初加賀齋一統本郷の待合よて八番組一番二番組
並びハ江戸中の鷹の者頭取頭道具中不殘出張手打故宅ハ
女房(お菅)並に子守葛西の(お民)と子分杉藏の(妹お里)よ
て四方山の世間斷の内子守ハ(娘お梅)を連遊せに出行路
急ハ空合來て初雷の鳴出に(お里)と女房(お梅)と日頃雷
嫌成事を知て居よば定めし困らふと種々介抱すれどまだ
時候違ひの事故時への蚊屋逆もなし如何ハせんと氣を揉
内ばらり々と雨降出し増々雷の音強(お里)ハ余り降ぬ内
宅へ歸るが宜敷と又二よハ近邊よ子守が(お梅)の相手を
かし辻よ居様も斗られず見掛なば踏る様傳言頼むと双方
の用事を兼て出行ける所へ欠來る鷹の己の介是も一統の
仲直より此日所々へ禮廻りよ歩行たる出先より一目散よ

戻り來るハ是も大の雷嫌ハ折ハ稻光の目先ハ掛何分表を
歩行仕難く多勢を扱て戻りし所内ハ女房が雷嫌ハ(己
之介)ハ先兎も角も出入の質屋へ走附て蚊屋の質受致ん
と雲を霞と走行段ハ雷の音近く成(お菅)ハ何と詮方無と
つ追つて居りハ頼て欠來(己之介)が蚊屋の質受致せ
去連件の蚊屋を座敷ハ釣(お菅)を蚊屋の内へまをしを凌
其内ハ殊外の雷鳴ハ(お菅)ハ蚊屋の内ハ住居己之介殿ハ
取譯て雷が嫌と言て居れハ此内へ這入るが能と(お菅)が
詞ハ(己之介)と心も空ハ居りし折故何卒片端へ入て下さ
れと二人蚊屋の内にて耳を押ハ桑原の壁と題目を一心不
亂ハ唱居る折しも近所へ落雷ハツト斗りハ氣絶せぬ有様
にて打伏ける爰へ道々雨ハ逢合逢傘よて戻來り當家の
(梅吉)(雷五郎)漸々門へ入來お菅々と呼共答有ぬのに
扱ハ日頃雷嫌ハにわの蚊屋の内に打伏居るウと枕邊ハ呼
立ハ心附たる(女房お菅)頭今お歸り成かと髪のはつれを
かき上付蚊屋の内より出たる跡ハ今一人居る者有とあれ

成之辭成と問れて件の蚊屋の内より而目なげも出さるは
同仲間の己の介故主人の(梅吉)も不慮(お菅)も心を掛
(五郎次)が恠りな一見ば邊りに人もな玄内のお菅さんと
只二人蚊屋の内に居ると言ひこんな怪敷事は無と梅吉方
も戀の敵(五郎次)いたけ高よのゝまをを引に引ぬ(梅吉)
が二人を傍へ呼寄て能も我の間男まゝとお菅の其場で三
下半書で渡すも不便なと思へど傍も有合す五郎次の前も
有ば無據離縁と成を(五郎次)の得たり顔子供障でも日頃
か思を掛たるお菅故我物もせん胸算用又(己の介)の今日
限り親方子分の縁を切と立腹なすを言譯の成ぬは留守よ
只二人蚊屋の内に居たるが誤り言譯さへも立難く泪乍よ
暇を告兩人此家を出て行跡へ入來春木町の質屋の(手代
太助)にて當春己の介様へ捨利無まで御渡し申た看物羽
織帯の事にて梅吉頭が御扱ひの今日が日限でふり升故其
代金利足共御貸申も參しと言ひ(梅吉)心得て有合手箱の
其内より三十兩の銀を出し右の手代も渡してやれば傍も

見て居(五郎次)が己のが居ぬ上の返金の所謂無益と押し
むを一日口を聞かからいどこがどい迄返金の此(梅吉)が返
すが當然と利を非も曲ぬ男氣も元利残らず皆済なすの流
石頭の印成勢ひも人々感づける件にて幕
五幕日本郷菊坂首長家貧家の場此場り同二月中旬の事よ
いて當長屋に長らく住家なすは序幕に御茶の水に出たる
按摩道立の借家もて女房(おせつ)と言女盲目と青梅の百
姓の娘成一が不仕合もて此道立の妻と成此おせつ一人
の連子有名をお朝と言ひが此日奉公先春木町成伊世屋の
質店より内川もて親元への使も暫時暇を貰ひ我家に來り
言けるの父上母上毎夜旦那さまの肩腰を撫さす御世話
致作此身の物語りをなし今の父道立殿の前方の父の青梅
在の百姓にて其父上の妹も(お節)と言しが今の母様伯父
様死去の後へ所持の田地も賣拂持たる着類二ツにの時へ
の金子迄皆入用も遣ひ捨今へ寄邊も定めなきひがない身
分に成升たとお咄し申た其時に旦那さまの仰せよい夫と

誠に不便なり定めし内母の身が心細い事成んと金子五
兩下さりましたと懐中より金取出し父も渡を(道玄)の得
たり顔道の二筋一筋に堅ひ心の女房お節イヤ其金が一朱
う二朱あら夫の旦那が慈悲深ひ御方故に尤だが大前五兩
と云金で下されふ等が無と誠と言と聞入す何でも是の
我内の貧苦を見兼て奪ひ取持て來たのに相違無と言譯な
せど耳にも掛す老の足元踏めて突杖よりも突掛る胸のは
むらを押静めサア娘も一所に行此言聞きをするが能とせ
き立其手を(道玄)押し其詞の尤だがよもや左様な譯でも
有ぞい我が娘を一所も連行委細を断て見様からと止める
事を利ぬのは日頃能らぬ夫れ心若や道もて此五兩を遣わ
れんも斗らさずと止むる夫の詞を打消是の私店へ參り御
主人にお目見得して身の潔白を相立んと又も娘の手を持
て立んとなすを(道玄)と然ば汝一人參り篤と事の實否を
糺し若夫と専極らば我宅にて折檻爲んと又潔白なれば再
び戻さん御身一人行かすと夫の詞尤と(お節)の一人春木

町の質屋指て行過ぬ跡に(道玄)お朝を呼是娘我言事能聞
よ汝我家の貧苦を思必ず主人の恵みを受持來りしと思
共是にも手續きの有物成如何せし再び聞が其主人の肩
腰をさすると云ひ毎夜何時成やと親父の問も娘の顔を上
且那様が帳合を御仕舞被成の四過もて夫より奥の放れへ
行一時程さすり升と包す云ば(道玄)の胸に浮み一悪巧み
扱は旦那も抱れて寐なと悪事に猛き親父の言葉に夢にも
知ぬ娘の(お朝)思ひも寄ぬ其御詞左様な事の露程も無尤
御店の御内室は三年跡になくなり當時の旦那斗故左様
思召と無理成ねと堅ひ名代の御主人様決して獲らな事無
と言(道玄)胸算用の悪事を巧系筋故此言譯を承知せず
何でも抱寐をされたから夫で大前五兩と云金を貰たに相
違無と云張折しも門口へ同心の目明按摩(お兼)と云喚せ
者本の按摩と看板のみ女地獄と世も傳ふ世渡る業の悪者
が同木求め入來り夫の能ない娘御と共々言と詞詰又候
二人三人は友を呼子り鳴子口路次口入來ると序幕も出

し櫻木の(お花)の母のお爪まで此中へ割入夫の御尤成間
情だがハイ左様でハイ升と子供の口から言れもせず此場
の私が預り一所に内へ来るが能と娘を連れて我内へ心いさ
せさ行跡を(道玄)お兼見送て先上々吉の首尾も吉このお
爪に連させて遺たも實の女郎は賣兼てもくろむ狂言の筋
成と語るを聞て(お兼)左様して夫にの能智恵有やと云
よ我中事を仰書に書て呉る人の無り幸ひ直此邊りに書状
書の何某有其者に頼せんが如何して其書状をよきたり入
用成やと云に夫の密事に云難いと去めし合して出行ぬ此
舞臺廻と本郷春木町伊世屋質店れ場まで道玄女房(お節)
歸りたる跡見世の若い者打寄今見世へ来るお節殿の世よ
も馬鹿堅ひ人なりと囃取々する所へ(道玄)衣服改て見世
へ來り主人與兵衛に面會無娘が一禮せし上に金百兩借用
仕度由述ければ(與兵衛)の驚御身何故左様成不當の金を
申込ぞと言詞を打消て娘が毎夜御主人に抱寐をされるど
聞り方申さば姑の道玄故百兩位借ても能と夫で態々参り

と立派な云(與兵衛)並に番頭佐吾兵衛夫の大方偽だ
と返す詞(道玄)の然バ証據を見世申さんと云折柄門口
方以前の(お兼)入來り今宅にて道玄殿か娘を折檻被成後
此手紙を跡へ残し何へか逐天せりと右の手紙を讀上れを
伊世屋の主人と不義せし事を言譯無との文言は掛る事の
証據が出来るは是もて云分有問敷と云掛りたる(道玄)が大
聲云見世先に立人方も腹の立のを押堪へ見々術と知り
乍人の囃は恐れてか番頭の斗ひもて三十兩の内濟金先其
場を濟させんと渡す折柄其金待たと聲掛て立出と此家の
出入日影町の加賀(松藏)此道玄の内濟金を出し及ぬ
其譯の當正月十五日の夜御茶の水の人殺の傍は有たは此
其入と証據を出(道玄)胸り扱の障成かと思念と思
を(松藏)と申すつて行心此方でも拾た其入を持出て上の
調へを受けるが能か味にからんだ詞詰に返す詞も無振ひ
に遣人たる松藏の意も隨ひ少斗りの扱ひ金もて二人すこ
々歸宅なす件まで幕

六幕目 關口水道端 關口藤左衛門住居の場 此場の三月上旬
の事にして此關口の老母(おるる)の長らく病氣にて打臥
居其譯の一人娘の(お菅)の幼少の折小石川飛坂下れ稽古
所へ常磐津の稽古も通ひ居る折同家へ遊びに折々來る加
賀の梅吉と馴染竟は内を外な一惡縁成とわきらめて
右梅吉方へ遣りたるが其後又い娘が不所存より梅吉方
よて私通なし離縁を受しと申事梅吉の二葉よりと幼少の
折不義れ道を覺へたる不所存者掛る事に成行ても實家へ
逆も戻られず夫と云のも密通せし故是が此身の病ひの元
と悔み歎も親心折柄我家へ戻り來る主人(關口藤左衛門)
是も道よて娘が事を風の便に聞えつて何と詮方泣泪悽藤
太郎と打寄て如何いせんと思索なす同ト思ふ娘の(お菅)
我子を連れて門よ來て表向より入難き勘當受し身乍も産れ
し我家の庭口よ明て言れぬ胸の内母も一言咄し度思へど
どうやら表伏十方よ暮の鐘近く目白も有ぬ目も開みとつ
追つする其折(弟藤太郎)の早も聞附密に内へ伴ひて影

乍よ父母へ合す詞も泣明し有一次第を物語れを誠と思わ
ぬ兩親の汝若き折道成ぬ不義いたづらなして親に苦勞
を掛故其位な事仕兼問敷と意見の言ねど怒の詞聞(お
菅)の心れ内に今宵が最早親子の見納め離縁に成し身上
故只余所乍身のお詫も参りましたと斗りよて跡の何よも
云兼て程能暇を告てぞ立歸る折柄同組屋敷の内室兩人包
を携へ貨物故福分と出す包と重箱に白き強飯に關口煎き
心も心成ぬ所へ此重箱の其内の赤飯成と思ひの外白き強
飯といふうーひと家内一統打寄て頷を合す時時時
迷ふ夜鳥の泣か愁を告鳥に猶々心ならざる思持思案に果
てぞ居たりける此件よて舞臺廻ると湯島天神前梅吉内の
場梅吉と風邪よて屋敷を病氣引にちし宅よ居るのも女房
無一人身故に壁に云男やもめの事足す子守のお民と下女
替り世話のやけたる田舎者も一つの取得も眞正直明暮
よかりみ様を返して上て下されと頼の旬日守したるお梅
様が可愛故と子供心の一筋に門口へ來掛る(お菅)娘の(お

梅)を脊に負て内へと這入事成ぬと何卒最一度夫の顔見納た上此子だけ跡へ残して死度と想へど人目憚りて門より居る聲聞附守の(お民)の走り出よふまアおめへら御座らえつたど泣乍にお梅を抱き内へ入るとなす所を(梅吉)見附叱り附一旦離縁した者を内へ入る事成ぬと立派に言ひ世間の手前誰しも我子の可愛の同ト思ひの人情も張裂胸に打寄る波の哀れや内と外子守の(お民)の只よるく(お梅)ぐんせ泣乍梅吉の傍へ行途たりつたと取附膝真の泣寄親と子が引寄たるの千万の盡ぬ名残りの愛思ひ果し無れば子守を呼(お梅)を母に引渡せと突遣表よ母の影何と答も無りせむ扱ひ子供を爰へ置若や身でも拾ひせぬかと案事する門は落散一通手早く取上能見れを一部始終を書殘し我子を頼むの文面は初めて知つたる書置に是の打捨置れぬと子分の者を手分な一實家關口又片重の川端の有所を撰夫々手分云附て四方八方提打の明るさ身には天道の助け有らんと尋ね行此件にて幕

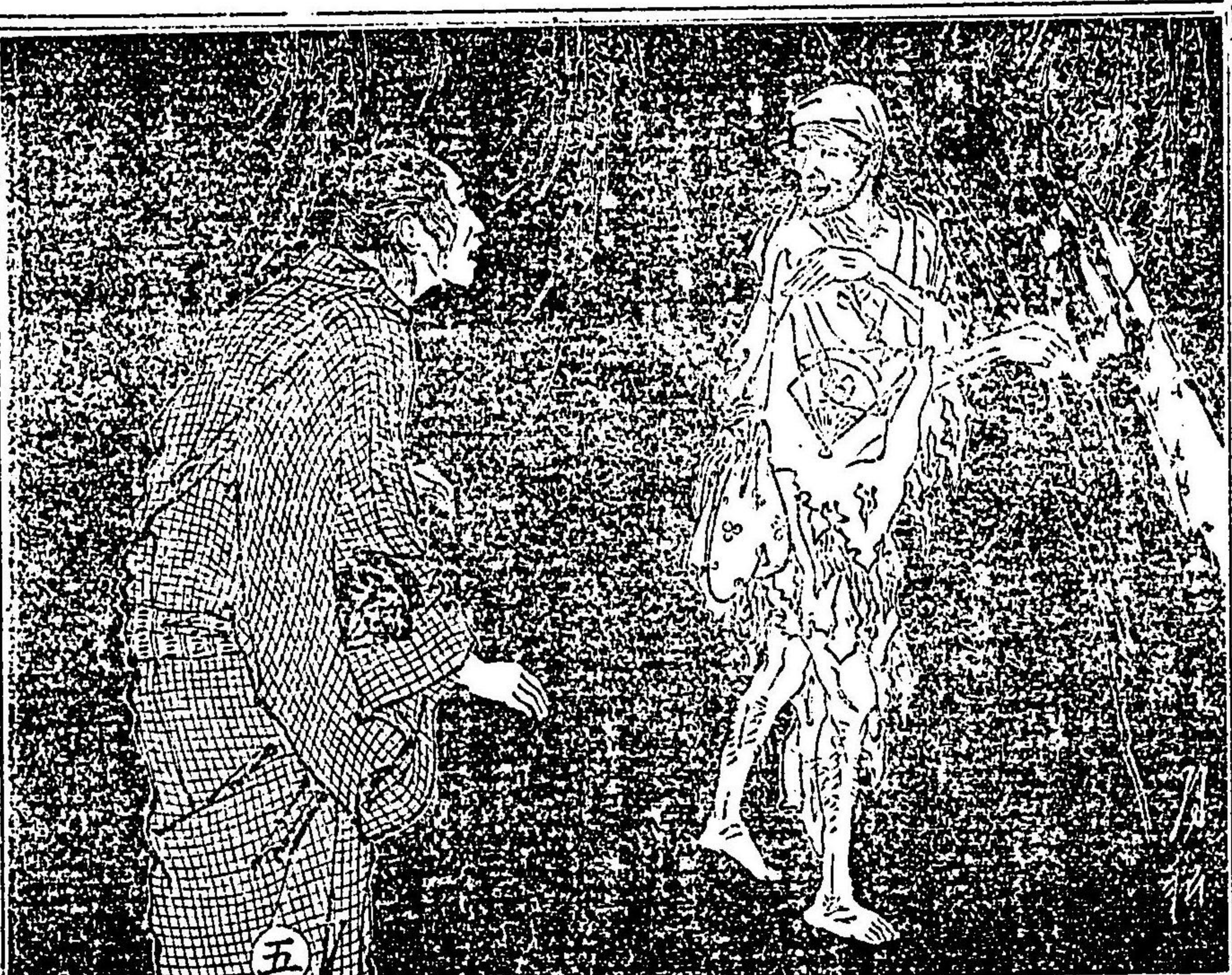
七幕目小石川龍慶橋川下の場此場の前件同夜四ッ過の事さて山の手歸りの往來も絶かすり又聞ゆる按摩の笛や駕屋の聲も無成てえんうとえたる様最物凄き有様成此場清元の淨瑠璃出語にて花道が前幕より出し加賀齋(五郎次)物を考へ乍えはくと此所に來り當春(己の介)並に梅吉女房(お菅)の二人が事の起りを言立て首尾能内を離縁させ我物よせん木算も悪ひ事成就せぬ物にて竟も其事露顯して加州侯の屋敷へ暇も成又(お菅)の貞女よて再夫の持ぬと断られせこへ取附鳥も無所詮此江戸も居れねど遠國他國へ行た所が何の目當も無事故いつろ江戸の内に居て何かな有附事無かと思案よ盡て居たりし折しもさつと吹來る雨風と共にイむ死神の姿の目も見得ぬ共襟元寒さよどつと身よ染急よ心よ無常を起し是の死んだが増成んと心附たる塚の端よ招ぐ思の川柳東風へ來いと風のつれ引る、心寄添て有合細を樹の枝に掛るも傍で死神が差圖とえらぬ(五郎次)の首を釣んとよて考へ今此所で

樹の枝に此身を掛れば跡々よて仲間が笑うよ違ひない是の一筋身を投て死ぬが何寄能手段と邊りに有合重りをと見廻す目先よ死神と差圖をなして小石を拾ひせ己が袂へ集めつ、是にて心残りいあしと前成川へ行道のえらぬも附添死神が袖を引たる案内よ引連々川岸へ連行やと思ひ一問も無とんぶり身を心投込んたり是にて附添死神の嬉し喜び跡見送り凄き笑ひよまぎらして見る間に薄く成にける爰へ幸ひ來懸ると伊勢屋の主人與兵衛にて牛込より商用にて戻て爰を通る折道玄の娘(お朝)走寄て突當り見ればいつぞや道玄がゆすりよ來る其時の娘朝は如何したと尋よこあたの泪組御主人様誠に面目無事乍父が悪敷工より御惠を授し金子を種よ私を抱寐をせしと云掛り成事も皆お兼ねと云合仕組んだ仕事と云事を聞よ附ても申譯無此身の上と存せし所へ櫻木の母お爪と言者私を留る休よ無我家へ連行女郎よ賣目見得とやらよすると聞漸々其家を抜出て是迄参りの参ッてれと寄部の無身の上よいつ

そ身を投死ぬ外仕方が無と決心せしと語るよ(與兵衛)の悔り爲左程悪法普道玄なら是の何所迄も其方を助けて遣と死ふとせし(お朝)を伴ひ伊世屋の主人我家へころの戻ける入替つて前幕よ離縁されたる(お菅)只一人欠來り關口の實家二ツに梅頭の所迄暇乞せし其上と娘の事を書殘しあれ程頼み置たきを最早思置事無此上と身を捨て清き心の潔白立んと既に前成川端へ身を打込んとす所又も夜風の枝につれ顯れ出る死神が死を進めんとして心附此婦人はこの世へ遣り亡者の數へ入者成す助ん者ど打招ぐ向の方欠來る(松藏)扱ひ姉御の無事成かと死なんとす(お菅)を捕無理よ我家へ戻り行共に喜ぶ死神も悪人成五郎次)の入水なして相果て無貨の罪よ落入し(お菅)を助くる精心の實よ感トたものぞかし爰へ共々尋ねたる同加賀齋の(杉藏)故先四方山の入組断之宅で今夜物語らんと伴ひてよを行過る(杉藏)も共々喜ひ勇み立てを歸りける件よて幕

八幕目湯島寺門前の場松藏の子分は大勢打寄何も(梅吉)の親分子分と云れた者も(己の介)の間違方あの(五郎次)の暇に成又梅頭の内のお菅さんいどこへ行たか行衛えれずあの人のえれぬ内今夜と是の夜明一だど四方八方へ手譯して夫々心當へ走り行様子見すま一伺ひ出るの前幕又暇と成し加賀梅己の介(五郎次)の工は掛り闇へ體に成た故晝間歩行げぬ身の上生て居る甲斐も無是から密に五郎次の内へ音信切殺し意趣返しをえた其上で此身も其場で自害して梅頭やお菅さんる潔白立る決心五郎次の住居へ趣かんと行んとなせ一其所へ行衛を案事る櫻木のお花何卒して己の介殿の身を無事よせん物と神々佛よ祈誓を掛心息せき尋ぬる所へ思こす逢の神佛の御引合せ成事り互ひ顔を見合せて無事を喜び様子を聞心是方五郎次を殺害か一共に此身も捨んと云詞を聞てお花の悔り五郎次を切殺す夫と勢ひの習ひ故是非も無事乍命を捨ると待て吳と留る其手を振拂ひ行んと一たる間もなく走附來

る加賀鷲の(兼五郎)二人が中へ割て這入(己之助)の胸の内と委細己が知つて居るが命を捨ると能ねへ事此間天神前の梅が所の蚊屋の間違ひも段々貴様の不義で無灯りが立たのミ成すお菅さんと小石川で身の云譯死ふと云のを通り掛つて(松藏)が助けて内へ送り込明りを立て遣つた上の共其身の明りを立る其前方に死んだ日よ無駄も犬死なすと云物又(五郎次)も其時に小石川の流れへ身を投死んだと云噂故悪ひ奴は五郎次と一部始終のえれたる上の死ぬのと思止せれと止むる詞よ(己の助)もお花と云兼五郎と云口を揃ひ一夫故に一先死ぬを止る件よ此舞臺廻る日影丁加賀鷲松藏内の場此所前夜の夜明の件にて(己之介)(お菅)の行衛を尋たる子分の鷲の者手手よ提灯杯片附贈とりしする所へ前幕よ出たる松藏の妹(お竹)兄貴の前へ兩手をつき今奥の四疊半へお菅さんをろつと寐し大血の道も落附た様子故そつとして置たると案心さする其所へ加賀鷲(兼五郎)己之介を伴ひ來一部



始終の物語よ(己の介)も様子を嘶身の明る心事譯り互ひに無事を喜ぶ折奥も出る(お菅)が喜び猶余り有(梅吉)の(松藏)の迎へ行たる(杉藏)と連立て急此家へ來り目出度(お菅)を元々よ歸す事よ定まる折しも一旦川へ身を投し(五郎次)再び助りて改心なして身の言譯に天窓すつぱり剃みばち身を捨たる説言に流石の物に譯り能加州の抱への鷲頭別も事無一統が笑つて丸く納まりたる目出度事ぞなかりける此件にて幕

九幕目本郷菊坂首目長屋道之内の場此所は四月中旬の事よして前々の場よて娘を女郎よ賣んとせ一を(お爪)の内よ透天なし行衛の知ぬよ道玄は女房(お節)の指圖成んど住居の柱よ(お節)をく一剛白張せへと責せつかん同木張る(お兼)も共金よ仕様と工だ事の玉をなくした腹いせよ打や情を知ぬ身の表の方よ(家主喜兵衛)踏次口よイみて長家の者を呼集たる按摩の(木我)同く(水戸崎)のいば市(女おせ)の白糸(お鈴)木我の悴ねぶ市(皆一統打寄バ傍

有合う古布子是の今此赤犬が長家の様の下よりくひへ
出したる古布子若心當りが有品なら誰でも引取が能又誰
も知らぬから此儘書面を添自身番へ出さねば成ぬと手
手に取上改むれば心當りの外でもなし是長家の道玄殿
が此春中着て居た布子と極めを附たに一眼のいぼ市の外
眼無長家中の贈さ咄を壁に耳有(道玄)が扱ひ我様の下へ
埋め置たる古布子を犬がくはる出したと見得るがあの古
布子の一件を若や詮議成ぬと能と案事折柄入來(喜
兵衛)道玄に打向ひ今長家の着の贈りの貴様の着物と云
事だか能改て受取と云共(道玄)空吹風夫の我らの覺へ無
大方此長家は椽の下が吹抜に成て居る故隣地面の明地
ちくはるて参つた物ならんと云紛らせを家主と扱ひ左様
のと其品を持て立んとす折又息遣ひさる哀れ成苦敷聲
の聞ゆれ心われの何人成やと問ば女房お節又候へ共余り
我申事を用ひざる所より惣身細めてく、し上あの隅に置
たると聞に家主驚きて女の身として亭主の詞を背くと能

無事なれど去ばると言ひ手荒ひ事先としが預り宅へ運行
篤と意見をした上で心得違ひあらぬ様言聞せんとかす所
(道玄)夫を止るの胸の木算違う故惡事露顯を厭う故知ら
ぬ(お節)の何卒か家主様へ委細か晰申度と泪に與て頼む
まご先鬼も角も預からんと女房お節を伴て表の方へ出行
跡道玄(お兼)の顔見合せあの古布子に是ぞと云何ぞ手掛
の有りせぬかと聞に(道玄)有共々の布子に血汝附殊
に袂に盗み取たる書附の反古有る若自身番へ上られてと
此身の上が案事られるが是の一思案せねば成ぬと互ひに
嘆る胸の内外に一人の使らしき男が來つて頼むのは竟
近邊の駕やから料治をして貰ひ度由道玄心に足だかまる
大事が有る体能斷り病氣と偽る詞を聞か前が道玄殿成か
と云聲諸共踏込を早くも廻り御用の手先數多此家へ入
御用へと云聲に行燈打消眞の關邊り眞關手搜りよて二
人の惡人捕へんと上を下へと尋ぬる内勝手知つたる道玄
お兼すきを伺ひ逃去ける此だんせり立廻りにて雲舞廻る

本郷加賀屋敷表門前の場同夜の事よて爰へ道玄逃來りは
つと一息付間もあく又八方にて御用へと捕手の聲の掛
ること網裏の魚は異成す(道玄)最早絶体よて姿を替工風
ををし逃んとすれを町木戸のとざしも成ぬ手配りに扱つ
くぐりつ立廻れと御用の聲も足すくみ逃る事叶はずして
竟に本郷六丁目の木戸の角よて手先の者に折重成て身動
き成す手先頭(勘六)親方の手先よて八重十文字の綱目よ
逢一先六丁目地身番へ上らる、所よて幕
同引返し木村木丁三丁目三四自身番の場此場前本郷よて
道玄を召捕へり同夜本郷自身番より此所へ引來り御出役
(坂田貝助)出頭有て本郷菊坂家主方訴へ成たる書面に
引合せ引合人同長家家主喜兵衛を初め接摩(いぼ布)木
我とせ(白糸)(お鈴)皆々一應布子の事御調に相成夫本
繩に掛りたる(道玄)を出役の前へ呼出生國上羽沼田の者
成事方年は四十一才成事一應御尋有て布子の血汝の調有
を(道玄)の一向覺へ無由中開く故右布子の袂出たる書

附を出此書附に青梅在百姓太次右衛門の通ひ帳の紙是有
左すれば當正月十五日の夜御茶の水にて人殺しを致金子
奪取たる(道玄)の仕業ならんと再三再四の御尋問よ一
向知らぬと申張然らば手先の者責て申させいと手先三
人道玄の左右よ寄添箱に掛申上い々と撰棒追取打音の表
よ聞ゆる有様此世の地獄は異成す此聲洩て聞居たるの
同ト引合人たる女房(お節)扱ひ正月十五日我實兄(太次
右衛門)を害したるの夫道玄の仕業成か如何して夫婦と
成るか宿世の因果と云乍掛る事に成行て憤け無身の上と
悔む折から娘のお初主人にかくまわれたる所方道玄お兼
御手當り成一を聞母の跡を慕ひ來て兄の敵が打たいとわ
せれど最早四人の指差事の成ぬ身もど迄も白狀せねど
此上と釣一は掛んと云せり一繩を鳴居へ掛引上と云す表
か本郷自身番を送り來る(四人お兼)只今本郷よて下調の
時残らず白狀せし由にて爰に於て出役の兼方白狀よ及び
し上は所詮明白成ぞどのつ引成ぬ天下の出役今の包むよ

詮すべ無余義無申上^し升^りと正月十五日の夜百姓太次右衛門
 を殺害^せな^し金子^を奪^ひ其後罪^を隠^{さん}が爲太次右衛門妹
 と知^り我女房^をな^し連子^(お朝)をかぞわ^りさんせし所
 犬^が喰^へ出^たる布子^を露^顯な^し掛^る細^目を受^たる上^の最
 早白^状及^り升^{ると}一々無^落申上^れを^出役^の記^載奇^し此上
 の兼^も悪^事の有^女明日^日共々大^番屋^に於^て調^をな^せバ今日
 は是迄^成と一^統に案^堵の思^ひな^{した}る悪^人亡^び善^人の
 再^び榮^る勤^善懲^惡治^る御^代の有^難さを此^結局^にして幕
 大^切上^瑠理^淺草^公園^夢の場^此場^當明^治の春^よして公^園よ
 夢^の屋^と言^何でも見^度夢^を趣^向よ^て見^せると言^家有^愛へ
 公^園を遊^歩の人々此^見世^へ來^り種^々夢^の注^文をな^し狂^言
 盡^しを好^む者^も有^又或^一人^の歌^がる^たを仲^見世^よて求^め
 來^れを逆^もの事^よ此^歌が^るたを授^者に競^べて夢^よ見^度と
 の注^文に是^方内^に這^入所^よて舞^臺替^と(清^元延^壽太^夫連^中)
 中^{(竹}本^太夫^連中⁾の上^るり掛^合よ^て四^季の^花を畫^書た^る
 銀^鏡の御^殿廣^間へ(在^原の^業平⁾を初^として(小^野の^小町⁾よ

(僧^正遍^照)又^り(侍^女の^白菊⁾に同^{(萩}野^松ケ^枝)方^續て不^意
 ん出^たるの^いろは^がる^たに名^{の高}亭^主の好^な赤^烏帽^子)
 は是^ぞ小^野の道^風ふ^て柳^を兼^し出^立成^文は(盜^賊月^夜)
 釜^九郎^{(股}潜^の韓^信)又^り(館^屋の^幸藏⁾は此^{(韓}信⁾の通^ト
 役^之所^謂習^ハぬ^經を讀^{(門}前^の小^僧)成^互に寄^合集^會も世
 の中^睦有^難さ御^代は名^負花^見時^梅松^櫻も美^事成^小町^の
 振^ふ心^さへ亂^る、萩^の原^中や八^疊敷^の椽^先も月^見が^てら
 の盃^よ汲^かひ^す手^の而^白く打^や太^鼓や太^鼓や鼓^よ小^野の
 道^風初^めとして韓^信と共[、]又^互ひ^又興^の藝^盡一^チン^フン
 カ^ノの唐^人の寐^言と^言し韓^信も末^の浮^れて日^本の詞^よ成
 や唐^人の寐^言に非^ぬ唐^人館^の市^兵衛^成が駿^東の趣^向よ^化
 る館^賈が一^座の興^よ御^愛敬^と化^た皮^をバ^むさ^かけて田^舎
 節^{から}小^歌の手^踊り何^{でも}ム^れと藝^の奥^の手^技よ^准名^一
 新^趣向^の新^上る^りを賑^やの^よ先^今日^は是^切と打^出
 明治十九年三月一日御届
 同 年全月 日出版 (定價八錢)
 編輯兼出版人 日本橋區 齋藤長八
 賣 元 日本橋區 齋藤長八